

that 痕跡効果に課される 2 つの EPP の要件

柳澤國雄

1. 導入

節が主語を持つことを規定する拡大投射原理 (Extended Projection Principle: EPP)は様々な定式化がなされてきた。近年では Chomsky (2015)がラベル付けアルゴリズムの観点より、単独ではラベルを提供できない弱主要部 T の性質に EPP 効果を還元している。that 節からの抜き出しにおける主語-目的語の非対称性、that 痕跡効果は、主語との ϕ 素性共有を必要とする弱主要部 T の存在により生じると分析される。

- (1) a. What did he say (that) Laura bought?
b. Who did he say (*that) bought the rutabaga? (Perlmutter (1971: 108))

弱主要部 T のラベル決定のために wh 主語句は埋め込み節 TP 指定部に留まり転送を受けることにより、主節へのさらなる移動は(2a)で示されるように不可能となる。一方、that が非顕在的な場合(2b)には、that の削除により C のフェーズ性が T に継承されることが仮定されているため、転送領域は T の補部となり、T を強化した TP 指定部の wh 主語句は転送領域から外れ、主節への移動が可能となる。

- (2) a. [_y that [_β who_[φ] T_[whφ] [_α t v...]]]
b. [_y ~~that~~ [_β who_[φ] T_[whφ] [_α t v...]]]

しかし、Chomsky の弱主要部 T の要件による EPP 効果の分析は、(3)の副詞効果と呼ばれる介在する副詞句による回復や、(4)のイントネーションの韻律的要因による回復、(5)の場所句倒置構文に見られるような ϕ 素性を有さない非主語要素の抜き出しに見られる that 痕跡効果を予測しない。

- (3) Who did she say that tomorrow would regret his words? (Bresnan (1977: 194))
(4) ?Who do you think that ___ WROTE Barriers (as opposed to say, edited it)? (Kanybowicz (2006: 222))
(5) It is in these villages that we all believe (*that) can be found the best examples of this cuisine.

(Bresnan (1977: 186))

一方、EPP 効果を韻律的制約とする研究の 1 つ、McFadden and Sundaresan (2018) (以下、M&S)は、音調句 (Intonational Phrase: IntP)の左端は空であってはならないと規定する An (2007)の Intonational Phrase Edge Generalization (IPEG)に EPP 効果は還元されると主張している。転送を受ける単位であるフェーズ主要部の補部はその左端に範疇的に IntP が配列されると仮定することで、フェーズ主要部 C の補部の左端である TP 指定部には顕在的な主語を必要とする Overt Subject Requirement (OSR)を M&S は提案している。that 痕跡効果を OSR の観点から分析するにあたり、IntP 境界はその左端の要素の移動に伴って拡張することを M&S は追加で提案している。補文標識が非顕在的な場合(6a)は、TP 指定部から CP 指定部へ wh 主語が移動することにより IntP が拡張されるため、主語位置である TP 指定部には OSR を課されない。一方、顕在的な補文標識 that の介在により拡張は妨害されると仮定しているため、(6b)における TP の IntP は拡張されず OSR の対象となる。また副詞効果(3)は、副詞句による追加の IntP による韻律の再配列により、wh 主語の移動に伴う IntP の拡張が顕在的な that の場合でも可能であると(6c)のように規定している。

- (6) a. ... [_{CP} (_{IntP} wh \emptyset [_{TP} \leftarrow_{IntP} t T [...]
b. *... [_{CP} wh that [_{TP} (_{IntP} t T [...]
c. [_{CP} (_{IntP} wh that [_{XP} (_{IntP} X [_{TP} \leftarrow_{IntP} t T [...]

M&S の提案は、副詞効果を含む韻律的な要因による回復効果だけでなく、OSR を満たす顕在的な要素を主語のみに限定していないため、非主語要素の抜き出しにおける that 痕跡効果もまた説明可能である。しかし、主語移動に伴う IntP の拡張を仮定しているため、主語の話題化の非文法性(7b)やその副詞効果(7c)を予測することができない。

- (7) a. John thinks that Bill, Mary would never love.
b. *John thinks that Mary, would never love Bill.
c. John thinks that Mary, under no circumstances would ever love Bill. (Douglas (2017: 19-20))

2. 提案

本稿は、弱主要部 T の要件と韻律上の要件の 2 つが EPP を構成すると提案する。

第一に、顕在的な主語を TP 指定部に要求する Chomsky の弱主要部 T の要件に関して、ラベル付けが収束す

る限りにおいて、主語のコピーであっても随意的に弱主要部 T の強化が可能であると仮定する。

第二に、M&S の OSR を採用するが、移動に伴う IntP の拡張や配列の差異は C、T の併合の方法が要因であると提案する。Mizuguchi (2019) に従い、(8a) に示すように、*that* が現れない節は C と T との対併合によるフェーズ主要部 <C,T> が形成されると仮定する。転送領域の左端が TP である *that* が顕在的な場合の(8b)とは異なり、<C,T> が形成される場合の転送領域は vP となるため主語位置(<C,T> 指定部)は IntP の左端と一致しない。

- (8) a. [_{<C,T>} wh <C,T> [_{vP} (IntP ...
b. [_{CP} wh C [_{TP} (IntP t T [_{vP} ...

3. 分析

that 痕跡効果を示す埋め込み節からの主語抜き出し(1b)はそれぞれ以下の派生をたどる。

- (9) a. [_γ who that [_β (IntP t T [_α t bought the rutabaga]]]
b. [_λ wh <C, T> [_α (IntP t bought the rutabaga]]

that が顕在的な場合(9a)は、TP 指定部の wh 主語が CP 指定部へ移動をするが、そのコピーにより弱主要部 T の要件は満たされる。しかし、TP 指定部に配列された IntP の左端に顕在的な要素が存在しないため OSR 違反となる。一方で、*that* が非顕在的な場合(9b)は、C と T の対併合により T が統語的に不可視的となり、転送領域の左端も vP となる。これにより弱主要部 T の要件および OSR は主語位置に課されないため適文となる。また、(5)の非主語要素の抜き出しにおける *that* 痕跡効果は、動詞後の主語との長距離一致によって弱主要部 T の要件が満たされる一方、IntP の左端に存在していた倒置要素がさらなる移動を受けるため OSR 違反となる。

副詞効果(3)は、(11a)に示されるように副詞句が転送領域の左端を埋めることで(9a)の OSR 違反を回復するために生じると分析される。また(9a)の OSR 違反は、(11b)のようにイントネーションによる韻律の再配列により IntP 配列が TP になされなくなることで回避可能である。

- (11) a. [_κ who that [_δ (IntP tomorrow [_β t T [_α t regret his words]]]
b. ?Who do you think t that [_{TP} t T [_{vP} (IntP WROTE Barriers?)

(7)の主語の話題化の禁止は、*that* 痕跡効果と同様に分析される。話題化した要素を指定部を取る主要部 Top がフェーズであると仮定すると、(12a)に示されるように IntP の左端である TP 指定部は OSR が課されるために主語の移動は OSR 違反となる。この違反は(12b)のように IntP 境界に副詞句を介在させることで満たされる。

- (12) a. [_κ Ø [_δ (IntP DP Top [_β (IntP t T [...
b. [_κ Ø [_δ (IntP DP Top [_γ (IntP Adv [_β t T [...

4. 結論

本稿は、EPP はラベル付けに関わる弱主要部 T の要件と IntP の左端に顕在的な要素なければならないとする韻律上の要件の2つから構成されることを、*that* 痕跡効果及びその回復効果の文法性を通じて主張した。

参考文献

- An, Duk-Ho (2007) "Clauses in Noncanonical Positions at the Syntax-phonology Interface," *Syntax* 10, 38-79.
Bresnan, Joan (1977) "Variables in the Theory of Transformations," *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 157-196, Academic Press, New York.
Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
Douglas, Jamie (2017) "Unifying the That-trace and Anti-that-trace Effects," *Glossa: A Journal of General Linguistics* 2, 60, 1-28.
Kandybowicz, Jason (2006) "Comp-Trace effects explained away," *Proceedings of the 25th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 220-228.
McFadden, Thomas and Sandhya Sundaresan (2018) "What the EPP and Comp-trace Effects Have in Common: Constraining Silent Elements at the Edge," *Glossa: a journal of general linguistics* 3, 1-34.
Mizuguchi, Manabu (2019) "Ways of Solving (counter-)cyclic A-movement in Phase Theory," *Linguistic Research* 36, 325-363.
Perlmutter, David (1971) *Deep and Surface Structure Constraints in Syntax*, Holt, Rinehart and Winston, New York.